

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：17104

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520510

研究課題名（和文） 認知言語学から見た英語の-ing 形に関する通時的・共時的研究

 研究課題名（英文） Diachronic and Synchronic Study on the English V-ing Form:
From Cognitive Linguistic Perspective

研究代表者

後藤 万里子 (GOTO MARIKO)

九州工業大学・情報工学研究院・准教授

研究者番号：20189773

研究成果の概要（和文）：本研究では、名詞、形容詞、現在分詞、動名詞、及び進行形構文として機能する英語の V-ing 形の振る舞いを記述・説明をする為には、認知言語学を基盤とし、共時的現象としての追求のみならず、これ迄歴史言語学的・対照言語学・社会言語学的・考古学・社会学な視野等から行われて来た研究の成果等を取り入れ統合し、多角的で複合的な見地からの探求が必要である事が得られた。

研究成果の概要（英文）： This study attempts to explain why the English V-ing form performs as a noun, an adjective, the present participle, the gerund, and as one of the constituents of the progressive construction. It demonstrates that the explanation requires viewing the form from an interdisciplinary perspective, which integrates Cognitive Linguistic synchronic investigation with what has been found in historical linguistic, sociolinguistic as well as topological research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度	0	0	0
総計	330,000	990,000	4,290,000

研究分野：認知言語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：V-ing 形、進行形、Middle Welsh Verbal Noun

1. 研究開始当初の背景

(1) 英語の V-ing 形は、1)動名詞、2)現在分詞、及び 3)名詞、4)形容詞といった 4つの品詞分類にまたがり、かつ 5)be 動詞に続いて進行形構文をなす。しかし、この一つの形式に対応している、1)～5)を包括する概念をどうとらえるべきか、また 1)～5)のそれぞれに意味機能がどのように関係付けられるべ

きか、等については、これ迄の、認知言語学に於ける一連の Langacker の認知文法の枠組みで提案されて来たことだけで捉えるには限界があった。即ち、V-ing 形が 4つの品詞として機能する際の個々のスキーマ、またそれらを統括するコアスキーマの記述・その理由等が説明できていなかった。

(2) 現在進行形やアスペクトの定義や terminology が、研究者によって、分野等学問領域によって、まちまち かつ曖昧で、それらの輪郭に関してコンセンサスが欠けており、広い視野からの研究を妨げていた。(例えば、進行形をその V-ing 形の基幹動詞が動作動詞(perfective な事態を表す動詞)と定義すると、古英語から近代英語の be+ 現在分詞(V-ende, etc.)の連鎖の中には、進行形構文とは呼び難いものがあるが、進行形として扱われていることがある、等。)

(3) 現代英語の V-ing と、古英語の動詞派生名詞 V-ung/-ing 及び現在分詞の V-ende、現代英語の V-ing、そして現代ドイツ語の V-ung/-ende・ノルウェー語の V-ing/-ende 等のを 含むゲルマン系諸言語の V-ung/-ing/-ende 形との関係に関する文献が存在しなかった。

(4) 英語の進行形は、近代、特に後期近代英語期に入って、頻度に於いても用法の広がり方などに於いても English Syntax の中で最も目覚ましい変化を遂げながら急速に発達したが、その背景や要因に十分な説明がなされていなかった。

(5) 現在分詞自体は、“Not **knowing**, ...” の様に基幹動詞が状態を表す動詞(Langacker の aspectual distinction の定義で言うところの imperfective)であっても構わないのに、進行形の構成要素の一つである現在分詞の基幹動詞の場合は動作動詞(perfective)でなければならない理由が十分に説明されていなかった。

(6) 古英語に於いて最初は V-ing に比して優勢であった名詞の V-ung は、時代を経るにつれ V-ing が優勢となった後、1250 年頃姿を消した。また、それから少し遅れて、現在分詞の形も、主流であった V-ende から様々な variants を経て 1600 年頃 V-ing に統一される形で取って代わった。またほぼ時を同じくして中英語期が終わる頃から V-ing が動名詞として発達し始めた。また中英語期半ば程から、V-ing 形は、最初は be+{in/on/at/→a/an}・V-ing の形で、その後も 19 世紀半ばまで、進行の意味を表す動名詞構文(voice-neutral であったため、そのように考えられる)の一部となっていた。その後 V-ing は現在分詞として認識されるようになり、be+現在分詞として進行形構文をなす様になった。だが、これらの変化を説明する理由が曖昧模糊としていた。

(7) 進行形は、英語の根幹的構文の一つであるにも関わらず、その由来・発達過程

について、研究者間でも合意が得られず、現代英語における使われ方を支配する原理の要因についても未解明の部分が多い。由来については、ラテン語起源説、フランス語の影響説に加え、Celtic Hypothesis との関連が最も有力視されるが、未だに諸説紛々としており、特に 16-17 世紀の経緯については不明瞭なことが多い。

2. 研究の目的

本研究は、「研究開始当初の背景」の欄に記した V-ing 形にまつわる上記 7 点の謎の解明を目的とした。そのため、本研究では、Langacker の認知文法の枠組みにおける様々な V-ing 形についての記述説明を基盤とし、その問題点を脱却するところから出発し、Langacker の認知文法では未解明の、V-ing 形が 4 つの品詞にまたがる理由やそのコアスキーマを捉え、4 つの品詞範疇に属する V-ing 形、及び進行形における V-ing の個々のスキーマ、それらの共通性・相違点・相互関係の記述を目指した。また、その為には、これまで認知言語学、対照言語学、歴史言語学、社会言語学等で、個別になされてきた V-ing 形に関する様々に蓄積されてきた研究を融合させ、複合的な視野から、謎多き V-ing 形の特性や、その振る舞いを支配する要因を明らかにすることが必要であった。

3. 研究の方法

1) 英語の V-ing 形については、認知言語学、歴史言語学、(特に現在進行形については社会言語学を含む)といった個別の研究領域で、個々に盛んになされた研究を、統合し包括的に捉える研究はないままであったので、まずは、それぞれの領域におけるこれまでの研究を調査する形で始めた。特に古英語における V-ing 形(名詞)や V-ende 形(現在分詞)から中英語以降の 4 つの品詞にまたがる V-ing 形への歴史的变化に関する研究書・文献を網羅的に収集・調査し、これまでの英語史研究・歴史言語学の蓄積を概観した。

2) 認知言語学の Langacker の認知文法の枠組みで捉えた、英語の V-ing 形に関わる品詞・進行形・アスペクトの輪郭を軸に据え、これまでの共時的及び通事的研究の成果を再検討した。特に古英語、中英語の be+V-ing の連鎖の例については入念に調べた。

3) 現代ゲルマン系諸言語(ドイツ語、オランダ語、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語、フリジア語、アイスランド語、等)、及び古英語における、V-ing 形(名詞)や V-ende 形(現在分詞)、またそれらの言語における(英語で言えば進行形が表す)進行の意味を表す形式、のあり方・使われ方、につ

いて、各種文法書や言語学専門書、研究書、またそれぞれの言語が母国語の人々、それらの言語を専門とする研究者とのやり取りを通して、詳細に調査し、中英語・近代・現代英語の V-ing 形のあり方・使われ方と比較した。特に、英語に言語的・地理的にも歴史的に見ても、最も関係の深いノルウェー語の V-ing 形(名詞)や V-ende 形(現在分詞)に関しては、詳しい専門書がノルウェー語で書かれたものしかなかった為、ノルウェーのオスロ大学に赴き、現地の研究者からの情報を得ながら、詳細に比較した。

4) 考古学や社会言語学、歴史言語学的な研究文献の精査、Celtic Hypothesis に関する文献を網羅的に調べた。

5) 上記の事項に関する研究を学会で発表・学会誌に投稿する等し、フィードバックを得る事によって、新たな展開を図った。

4. 研究成果

1) 現代標準英語の V-ing 形は、共時的に見ると、基幹動詞に接尾辞の-ing が付随し、時制の形態素が伴わない為に、基幹動詞が表す事態の時間的位置づけが捨象されているという点で動詞性が無い、もしくは希薄化されているという点だけしか共通点が見当たらない。即ちその点以外に、名詞(king)、形容詞(a sleeping car)、現在分詞(a cat chasing a rat)、動名詞(chasing a rat)としての V-ing の、共通する要素あるいはコアスキーマは抽出しがたい。また、共時的に見ても通時的に見ても、V-ing 形が多岐の品詞またがっている現象を説明するには、英語 internal な現象と見なすには無理があった。その為、英語以外の言語の影響が、考慮すべき事柄として浮上した。即ち、上記現象は言語接触によるものと考えうる。

2) Langacker の認知文法では未だ捉えられていなかった V-ing の新たな側面を、歴史言語学・社会言語学の成果を取り入れる事によって見だし、多角的に捉えることによって、認知言語学の水平線を広げた。

3) 英語以外の現代のゲルマン系諸言語に於ける V-ing/ V-ung 形は、全て名詞でしかなく、形容詞・現在分詞の最も優勢な接尾辞は -ende, ande 等とそれらの variants でしかなく、いずれも目的語を取るといった点での動詞性はない。古英語でもまた、V-ing 形は、これら現代のゲルマン諸言語の V-ing 形と同様に、純粹に(例えば、king 等、また gender は主に女性だが男性の場合もある)名詞であ

り、-ende が現在分詞の接尾辞であった。その後 V-ing が、**英語でのみ**、V-ende に取って替わり形容詞・現在分詞の機能も持つ様になり、動詞性を獲得し、中英語期以降は、動名詞の形式ともなり、**英語でのみ**、進行形をなす要素として急速に発達した。こういった英語における特異な変化によって V-ing 形は4つの品詞の機能を包摂した形で存在する様になったことが解った。その背景に、名詞・形容詞として、また、前置詞を伴って現在分詞・(目的語を伴い副詞で修飾される動詞性を持った名詞として機能した、Insular Celtic で動詞派生名詞である verbal noun の存在があるという可能性が、Middle Welsh の verbal noun と中英語からの英語の V-ing 形とのあり方との共通性を探る事を通して浮かび上がった。これを 2011 年の論文に纏めた。

Insular Celtic で verbal noun は、mutation によって、語順によって、また particle または前置詞との連携によって等、様々な要素から機能が分かれ、英語的にみれば4つの品詞に対応する違いが存在したことが解った。それが、非征服者が征服者とコミュニケーションを図らざるを得ないために、征服者の言語を獲得する際に、数多くの形式・パターンがあった征服者の言語における verbal noun が V-ing 形に、簡素化される形で置換されたと考えると、現代英語の V-ing が4つの品詞にまたがることに自然な説明が成り立つ。この様に、V-ing の変化を、非征服者が征服者の言語を獲得する言語接触の一現象として捉えると、征服者の言語にあった gender や case の消失も同様に説明がつく。ドイツ語等では今でも gender や case が存在するからである。その点に加え、Middle Welsh の yn+verbal noun 構文と中世から近代までの英語の進行形構文との類似性を、平成 22-24 年度に出版された論文に纏め、その概要と一部を平成 23 年度の国際歴史言語学会で発表した。先行研究には、Middle Welsh の yn+verbal noun 構文と現代標準英語の進行形との類似性を指摘するものはあったが、それ以前の英語や方言に於ける進行形の形や意味機能との比較を行ったものはなかった為、early English の進行形と Middle Welsh の yn+verbal noun とを比較し共通性を明らかにした点で、一定の評価を得た。また両者は Celtic Hypothesis で最も重要視されている構文であるため、そこに資するものであるという評価も得た。両者の共通性は以下の通りである。

- ① Welsh でも verbal noun は4つの品詞にまたがる使われ方をし、それらの品詞は V-ing が近・現代英語で担う4つの品詞と同じである。
- ② Middle Welsh の be+yn+動作名詞構文が、中世の口語文献の be+in/zero+V-yng 構文に意味も用法も頻度も酷似しており、yn と in/a-も音声的にも意味的にも近い。
- ③ Middle Welsh や現代 Welsh の yn+verbal noun 構文も、中・近代英語の進行形はでも、informal な場合に使われる傾向にあった。英語では 17-8 世紀迄は使われていた V-ing に a-等が前置する形になると更にくだけたい方となる。
- ④ この場合の a-は、一部では particle と捉えるべきだと異論を唱える人もいるが、一般的には前置詞と捉えられている Middle Welsh の yn と発音が酷似している。
- ⑤ 英語の進行形は 18 世紀まで voice-neutral で、かつ V-ing 形には in/on/at/an/a-/zero が前置し、目的語も of に連なることがあり、概念的意味的には動名詞構文の性質を帯びていた。
- ⑥ Middle Welsh の verbal noun 自体も mutation が有ったり無かったりする yn との連鎖で多様な機能を持つため、yn と連鎖する頻度が高く、英語でも V-ing は in に続く頻度が極めて高い。
- ⑦ DNA 研究では現代の英国人の多くが Celt 系であるとする研究もある。それは Celt 系住民は非征服者であった為、中世まで残存する文字文化に携わる機会が稀であったのが、活版印刷や教育が普及するにつれてその機会が増えていったことと進行形や V-ing 形の文献上の頻度の増加とがほぼ比例することと符合する。

4) 上記2)、3)に於ける研究成果は、一連の社会言語学の研究、特に Hopper and Thompson, Trudgill 等の研究において言語接触により、統語構造が簡素化される様々な事例の一つとして考える事ができる。国内の学会、及び紀要論文において V-ing 形の変遷という事例を通して Celtic Hypothesis の信憑性を論じた。国内では、20 世紀の Baugh & Cable (1951)等の主たる英語史研究を受け、国内の英語史研究では、極めて少ない固有名詞等を除けば、ケルト語から英語への影響は殆どないと考えられて来た。そういった見解に懐疑的な、2000 年以降の研究や、一連の Trudgill 等の研究、また語彙的要素は Substrata から Superstrata への影響は少ないが、Syntax の側面から見ると影響があり

得るとする、社会言語学的研究成果を基に、Celtic Hypothesis が V-ing 形の事例からも支持できる事を示すことができた。

5) 進行形の起源に関しては、Celtic Hypothesis との関連が最も有力視されるが、進行形が主に話し言葉で多く用いられる構文であったと考えられるため、残存する文献上には存在しないことから、未だに決定的な証拠は見つからない。しかしながら、以下の (a)~(c)の解明への橋渡しとして、傍証を進めるに至った。

(a) 19 世紀前半程までの英語や、ブリテン島やその他の地域における、現代の英語の様々な方言では、現在進行形の基幹動詞が状態を表す場合 (imperfective)、すなわち現代標準英語では非文となる He is knowing が He knows の意味で使われる場合があるなど、英語の進行形には様々なバリエーションがある。その一方で、あくまで He is knowing は非文で、存在するとしても極稀で「知る過程の途中」を表すと説明される場合もある。これは、方言と標準英語の違いと考え得る。方言で He is knowing が使われている事実は aspectual distinction がケルト系言語には概ね存在しなかったことと関連が考えられる。英語の進行形にはそういった aspectual restriction に絡む複雑な面があるが、その複合的要因を整理し、現在進行形の通事的・共時的に洗い出された様々な variation をどう捉えるのかに関し、テキサス州立大学 San Antonio 校で発表し、その後更に社会的要素を取り入れた内容を纏め、国内の学会で発表した。

(b) 進行の意味を表すには、現代のゲルマン系諸言語やロマンス系言語等を含む欧州言語でも、英語の 19 世紀前半迄の書き言葉でも、単純形で事足りるが、19 世紀後半以降の標準英語でのみ、進行形でなければならなくなり、単純形との明確な役割分担を始めた。その原因として、18-19 世紀の英文法記述が浮上した。そこで、現在はまだ萌芽的でしかないが、その見地からの進行形の制限の起源に関する研究にシフトし始めた。後期近代英語期に頻度も使用範囲も急増した進行形の有り様、及び英文法書に見られる進行形に関する記述を網羅的に拾い集め、かつその原因を V-ing に前置した in/a の存在、及び Middle Welsh yn+verbal noun 構文の影響をより強く受けていたと思いきい {in/a}+ V-ing 構文との関係を探り出すべく、17-19 世紀の英文法記述の調査を開始した。その経緯について国内学会で発表した。

(c) Mittendorf and Poppe に挙げられてい

る Middle Welsh prose における yn+verbal noun 構文の例文は殆ど動作の進行途中を表しているが、一例のみ、英語で言えば I'm loving に当たるものが存在する。これと 18-19 世紀の文法書に例文として登場する I'm loving との関係が浮上し、その点でも 25 年度からの 4 年間の新たな科研費による研究への礎を築いた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者の戸籍名は後藤万里子、学術活動におけるペンネームは樋口万里子 (Mariko Goto Higuchi))

[雑誌論文] (計 4 件)

①樋口万里子、「Middle Welsh VN から現代標準英語の V-ing まで」、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要 (人間科学)、査読無、第 25 号、2012、9-35

②Mariko Goto Higuchi, “A Review on Cognitive Domains and Prototypes in Constructions”, *English Linguistics: Journal of the English Linguistic Society of Japan*, 査読有、28 巻、2011、344-356

③樋口万里子、「英語・ノルウェー語の -ing 形とウェールズ語の VN に関する覚え書き—通時的・共時的・類型論的考察へ向けて—」、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要 (人間科学)、査読無、第 24 号、2011、1-71

④樋口万里子、「現代英語の進行形の歴史と制限 — 歴史認知言語学の試み —」、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要 (人間科学)、査読無、第 23 号、2010、11-80

[学会発表] (計 8 件)

①樋口万里子「18-19 世紀の文法記述と進行形の制限」、福岡認知言語学会第 28 回大会、2013 年 3 月 25 日、西南学院大学 (福岡)

②樋口万里子、「複合領域から見た英語の進行形とその制限」、福岡言語学会、2012 年 5 月 19 日、九州大学 (福岡)

③Mariko Goto Higuchi, “Intricacy of Profiling the Present-day English Progressive”, Department of English Brown-bag Meeting, 2012 年 2 月 22 日, University of Texas, (San Antonio)

④樋口万里子、「The English and Norwegian V-ing forms and the Welsh VN」、英語史研究会第 21 回プログラム、2011 年 10 月 8 日、大阪大学豊中キャンパス・言語文化研究科 2 階第会議室 (大阪)

⑤ GOTO, MARIKO HIGUCHI, “English V-ing and Language Contact”, The 20th International Conference on Historical Linguistics (ICHLXX), 2011 年 7 月 25 日、National Museum of Ethnology, (Osaka,

Japan)

⑥ 樋口 (後藤) 万里子, 「英語の V-ing 形と言語接触」、近代英語協会 28 回大会、2011 年 5 月 20 日、福岡女子大学 (福岡)

⑦樋口万里子、「英語における V-ing 形の発達と役割分担について」、福岡認知言語学会第 23 回大会、2010 年 8 月 27 日、西南学院大学 (福岡)

⑧樋口万里子、「現在進行中の現在進行形研究：意味と形と歴史」、福岡認知言語学会第 21 回大会、2009 年 9 月 7 日、西南学院大学 (福岡)

[図書] (計 1 件)

樋口 万里子, 「英語の V-ing と Middle Welsh Verbal Noun」、『ことばとこころの探求』、査読有、2012、347-362

6. 研究組織

(1) 研究代表者 後藤 万里子 (GOTO MARIKO)
九州工業大学・情報工学研究院・准教授
研究者番号：20189773